

秋彼岸法要 九月十九日（月曜日＝敬老の日／祝日） 午前十一時から

彼岸法要後



バイソン片山といっても生粋の日本人です。東北は気仙沼生まれです。気仙沼生まれの片山と聞いて思い出してくれる人がいたらうれしいのですが、四年前にカッサバと称して音楽説法をしてくださったのが気仙沼市・地福寺住職の片山秀光師。師の弟さんがバイソン片山。なぜ、バイソンなのかは当日、うかがいましょう。

編集後記

○『日経おとなのOFF』という月刊誌があります。7月号は「どうする？葬式&墓じたく」という特集でした。雑誌がこの手の特集をするのは珍しくないこの頃、普通は買わないのですが、今一番の売れっ子仏教学者・佐々木閑先生の「お釈迦様の葬式はド派手葬だった」という記事があるので、買ってみました。他には、生前葬コンサートをした小椋佳さんのインタビューもあります。「本邦初！お寺さん冷や汗・全国地域別葬式の布施金額一覧」などという、けしからんコーナーもあります。それなりに、ためになる特集ですが、一つだけ信用しないで欲しいのが広告です。葬儀と墓の特集ですから、葬儀社の広告が「社だけありました。この葬儀社の親会社は石材店で日本各地に納骨堂のビルを建てていますが、ちよつと危ない企業です。危ないけれど、ジャスタックという株式市場に上場し、その事を宣伝文句にしていますからご安心。」

○月刊誌といえば、総合仏教誌『大法輪』の七月号の特集で、住職が「さいの河原の地藏和讃」の解説をしています。隔月で連載している「暮らして生かす禅ライフのすすめ」も十四話になりました。『大法輪』誌の凄いところは、教団発行のPR誌とは異なり、図書館にもあるし街の書店でも売っていることです。○右にある「見つけた」欄で紹介した仏教

掲載した写真はお正月にも紹介しました。その時は住職のミスでカラー写真ではなかったのですが、もう一度載せます。 仏教伝道協会発行の二八年・日めぐりカレンダーに採用された写真で、檀家の千田完治さんの撮影です。この写真には「降る雨は同じである」という言葉が添えられています。 この言葉を、どういふふう解釈するか。いろいろな理解のしかたがあるけれど、「降る雨を喜ぶ人もいるけれど、嫌う人もいる」と受け取るのが禅的ではないかな。歌人の永田和宏さんに次の歌があります。 濡れながら 若者は行く 楽しそうに 濡れゆくものを 若者と言う 永田さんの伴侶は、歌人の河野裕子さんです。河野さんは平成二二年に亡くなっています。その闘病生活をつづった『歌に私は泣くだろう』は、テレビドラマにもなったのでご覧になった方もおられるでしょう。 「濡れながら」の歌ですが、雨がふっても傘もささず、カッパも着ずに通学路を自転車走っていく高校生を見ると、「若いなあー、いいなあー」ところやましい思いで後ろ姿を見送ります。でも、もう一度あの頃に戻りたいかというのと、そうは思わない。 傘で思い出すのは、作家の沢木耕太郎です。沢木さんは就職した初日の朝、雨の交差点をたくさんの

不連続シリーズ「見つけた」

街かどに禅を探し現代に仏教を見つける

連続シリーズ



サラリーマンが傘をさして渡るのを見て、あの中の一人にはなりたくない、会社をやめます。入社日が退職日になりました。 これって、後になって文学賞を受賞するような作家になったから許されるけれど、ただのプー太郎だったら叱られます。 以上は傘をささない人の話でした。次は、傘をさす人の俳句を紹介します。 浜までは 海女も簗着る 時雨かな 作者は江戸時代の瀧瓢水（たきのひょうすい）一六八四〜一七六二）です。瓢水は今で言えば兵庫県加古川市で豪商の跡取りとして生まれますが、遊びが過ぎて一代で身上（しんしょう）をつぶします。そんな瓢水のもとへ禅僧がたずねてきます。瓢水は風邪を引いて薬を買いにでかけ留守でした。禅僧は「風邪を引いたくらいで、薬を買いに行くとは、噂ほどではない」と言ってお帰ってしまおう。しばらくして帰ってきた瓢水が、その話を聞いてよんだのが、「浜までは」の句です。 茶の湯の祖、利休居士の「降らずとも笠の用意に通じる心です。このように、「降る雨は同じ」でも対応はそれぞれです。 それゆえ、「おのれの狭い視野にとどまって、同じ角度からだけ見ているはダメだよ。ちよつ見方を変えてごらん。楽に生きられるよ！」と、禅は教えます。